



イタリア留学事情 ～その現場から～

この仕事に携わり、早や十数年。嬉しいことに、いろいろな人と接し、多くの質問に出会えることができます。学校スタッフというより、むしろ留学カウンセラーと化しているかもしれません。初めてのイタリア留学であれば尚更のこと、現地での生活の細かい点からイタリア語の学習方法まで、質問は多岐に渡ります。同じ質問でも、相談者が「大胆派」か「慎重派」かで、私の回答の受け止め方はさまざまに変化するのです。

準備段階では「どのくらい勉強してから行ったら良いか？」とよく尋ねられます。この回答に私ができるだけ添えるようにしている言葉があります。それは「イタリア語ができないから学校に通うのであって、できるのなら通う必要はない」ということです。これは現地で必ず陥るだろうスランプを見越しての言葉でもあります。すると大胆派は「留学すれば勝手に語学力が身につく」と楽観視します。一方、慎重派は、具体的なレベルなどを回答に求めます。この答えとして、あくまでも目安ではありますが、動詞の活用（現在形、近過去形、できれば未来形）までは知識として持ち合わせることを勧めています。イタリア語検定試験を例にすると、5級、あるいは4級に合格していると良いのではないのでしょうか。

当然、これが盤石の備えと言っているわけではありません。日本でイタリア語を学んでいる時は、先生は日本語を交えて教えてくれますし、生徒も大抵は日本人だけです。留学に備え、勉強してし過ぎることなど決してありません。現地の授業を想像してください。環境にもよりますが、基本はイタリア語漬けの毎日。スピードも、慣れない日本人には非常に速く感じます。このストレスを軽減させるには、出発前の準備を怠らないことが不可欠になります。現地では、欧米人のクラスメートが、会話中に思い思いの意見をその都度挟んでくれます。日本人には、躰の良さとも言いましょうか、他人が話している時は黙って聞く習慣があります。すると、どこで割り込んだら良いか判断しかねることが見受けられます。言いたいことを頭で考えてから口にしようとするから、さらに出番はありません。場合によっては、おしゃべり好きはさすが、ただの愛嬌のある人になってしまいます。そこで、ミスを恐れず、必死に割り込む“勇氣”が必要になってきます。「間違えを恥ずかしい」と感じる時もあるでしょう。そう思えたら、その瞬間に学んでいるのです。自慢にはなりません、私はこの“恥ずかしい”シーンを数多く持ち、どれも再現できるくらい鮮明に覚えています。あまり嬉しくない事実ですが、この積み重ねこそが大切で、実際効果的。忘れたくても忘れられない。恥をかかなくてこれ以上ない“記憶メソッド”なのです。また、口から発しない言葉は、いつまでたっても自分のものにはなりません。是非、勇氣を持って間違えましょう。ただし、大胆派に一言。恥ずかしさには慣れないでください。失敗をきちんと受け止めず、すぐに流してしまうため、カラダで覚えることをしなくなります。一方、慎重派に一言。間違えることを怖がるあまり、閉鎖的にならないでください。引きこもって、辞書やインターネットと友情を育んでいる場合ではありません。イタリアにどっぷり漬かれるチャンスです。さあ、外に出て、気さくなイタリア人との会話を楽しみ、たくさんの新しい出会いを発見しましょう！ イタリアにいてこそ感じられる

もの、気づかされるものがたくさんあるのです。

実際にイタリアで暮らし始めると、戸惑うことばかり。日本では当たり前なのが、うまく回りません。その最たる原因は言葉。それ以外に文化や習慣の違いから生じるものも少なくありません。留学生は自ら希望してその“違い”に飛び込んだはずですよ。にもかかわらず、イタリアで、日本の生活習慣などをそのまま当てはめ、もがいていることに気づかず過ごしがちです。結果、悪循環に陥ってしまう人もいます。イタリアに留学する人は、何かしらイタリアに関係することに興味を抱いていて、双方の違いにはとっくに気づいているはず。それに不便を感じることがあるのなら、「日本は便利だ」と捉えれば良いのです。

困っているなら、気持ちを表に出すこと。能面のよ様な日本人は、表情だけではなかなか思いが伝わりません。積極的に助けを求めましょう。困難を辛さや障害として



ただ捉えるのではなく、新しい発見だと思い、この“違い”を楽しむようにしてください。興味があることには、柔軟性があり、吸収力も早いですから、覚えるスピードは一層加速するに違いありません。

ちなみに、かく言う私のイタリア留学は慎重なように見えて、実に大胆でした。当時は今のように、指で軽く叩けば情報が何でも手に入るご時世ではなかったとは言いますが、情報収集には積極的ではありませんでした。もう少し慎重に計画を立てれば良かったかなと……。さらには、語彙力のなさから、閉鎖的になって自信を失い、負のスパイラルにもどっぷりはまったこともあります。クラスメートの留学生とは話せても、肝心のイタリア人とは通じないことがとても怖くて無言になりました。それでも、こういった苦い経験も今では「この仕事には役立っている」と身勝手にもポジティブに受け止めています。

最近では1週間から留学を受け入れてくれる学校も増え、イタリアを気軽に感じられるようになりました。午前中は学校に通い、午後は課外授業に参加したり、観光したり。ホームステイ先では、マンマの料理を堪能し、ホストファミリーとの会話も楽しめるでしょう。単なる観光では決して味わえないものが留学にはあります。イタリア語がちゃんと通じるだろうか。授業にはついていけるだろうか。右も左もわからないところで暮らせるだろうか。悩みはつきないかもしれません。けれども、学んだイタリア語をすぐに試し、それに磨きをかけ、加えてその背景にある文化までも直接肌で感じられるのは留学に限ります。動き出すことで見えないものが見えてくるものがあるのです。新しいことを知ることは楽しい。知らなかったことが自分の知識として身につくことも楽しい。イタリア留学を通して、一人でも多くの人にこの楽しさを実感してもらえれば、語学学校のスタッフとしてこれ以上の喜びはありません。

<職場で実感 イタリア人気質>

20代のはじめ、イタリアのレストランでの料理の修業を目的に、イタリア語の勉強をはじめ、その後イタリアへと渡りました。日本から年間、約1万人の料理人がイタリアへ修業に行っていると言われていたその当時。できる限り日本人の居ない地域のお店で修業をしたい。そんな思いから選んだ地域は、常に片田舎のレストラン。伝統的な料理を作り続ける店、クリエイティブな料理を提案する店など、修業先を変えるという事は、常に大きな変化であり、土地が変われば、料理も変わり、言語も変わる、そんなイタリアという国を目の当たりにしました。強いアクセントのトレンティーノに、呪文のような方言のプーリアと言ったように、イタリア人でも理解できない様な方言の飛び交う地域をはじめ、マルケやエミリーヤ・ロマーニヤと移り住むたびに、言葉には結構悩まされました。

イタリアではしばしば、地域によって食材の呼び方が異なります。特に魚介の名前にはそれが顕著に表れるようで、辞書をひいても魚介の名前が載っていないことが多いのは、その種類の多さからではないかと思えます。そんな中イタリア人の新しい同僚たちにとって、他の地域の異なる言い回しを喋る外国人の私は、滑稽であったのか、世話好きな彼らならではか、必ず“No, non si dice così!”とよく言い回しを訂正されたものでした。そして、郷に入っては郷に従う、その繰り返しの中で、その時々自分の置かれた環境に、徐々に馴染んでいきました。そんな中いつの頃からか、自分の中でできたひとつのルールがありました。それは、その土地、土地ならではの表現方法や、言い回しを覚えながらも、基本的にはスタンダードで標準的なイタリア語を喋り続けよう。それは、その当時、一ヶ所に定住するつもりがなかった事もあり、北イタリアっぽさ、南イタリアっぽさと言った地域色に染まり過ぎない事で、次の地でもまたその新しい環境に順応していこう。そんな理由からでした。

そんなイタリアでの厨房において、お店の顔でもあるシェフは常にリスペクトされています。しかし、たとえシェフや上の人間に対してで



あれ、おかしい事や、意見が異なる場合は、自分の主張や考えをしっかり相手に伝え、とことん話合う光景がよくありました。感情と情熱を芯に持つ彼らならでは、性分なのかもしれませんが、時にはそれが、派手な口論になり驚くようなシーンに出くわす事も何度かありました。傍で見てみると、この二人は絶縁して、同僚は仕事も辞めてしまうのかもしれない。と勝手に深刻に考えるような状況などもありました。しかし当の本人たちは、数時間後には、近くのバルで仲良くカフェを飲んでいたり、あっけらかんと、横で鼻歌を歌いながら仕事をしていたりと、その切り替えの早さには、驚かされました。

元に信頼関係があるからこそ、後腐れがなく、有意義な意見交換だったと割り切れるのでしょうか。いずれにしても、そういった気持ちの切り替えの早さは、彼らならではの特技と思いつつも、関係のないこちらの方が若干、調子が狂ってしまいます。

そしてもうひとつ。どのような仕事にも起こりうる、予期せぬハプニングや、時間的にどうしても間に合わないと思われる時のイタリア人の対応力。いざという時のポテンシャルの大きさを、様々な場面で感じました。個人的な見解では、多くの日本人は、うさぎとかめの物語に登場する“かめ”タイプ。小さな積み重ねを大切にし、着実に物事を進め、結果に到達しようとするのに対し、イタリア人は、余裕余裕と、ギリギリまでのんびり構えています。決して、イタリア人がいつもさぼっているのか、そういったステレオタイプを強調する訳ではありませんけれど……。そして、いよいよリミットが差し迫ると、大慌てこそしますが、その後はアクセルを全開にして、不可能かと思われることを、結果的には時間内にやり遂げてしまうのです。切迫した状況に置かれると、普段には想像できないような力を出すその様は、まさに火事場の馬鹿力。ただその言葉の意味合い通り、ハラハラ、ドキドキしながら、そういった切迫した状況をくぐり抜ける訳です。そして終わってみると「いやあ、あの時はどうなるかと思ったけれど、Ce l'abbiamo fatta! やり遂げたね」とその話で盛り上がる。そういった場面に何度も遭遇していると、ふと。そういったスリルを楽しみつつ、後に武勇伝を語り合いたいがために、毎回あいつの状況をわざと作り出してるのでは?と疑いたくもなってもきてしまいます。まるで、うさぎとかめの話の教訓を否定するかのようですが、想像以上の結果を残す事で、結果良ければ全て良し。彼らの人柄やお国柄が顕著に表面に出る瞬間のひとつかと思えます。

そんな彼らも違う側面では、伝統を重んじ、古くから築き上げてきた物や精神を非常に大切にしています。イタリア料理界でも指折りのあるシェフが「イタリアの料理の基礎は各地に根付いてきた伝統料理であり、たとえ独創的な華やかな料理だとしても、その料理を一口食べた時にノンナ（おばあちゃん）の料理や、懐かしい伝統料理の味を彷彿させてこそが、良いイタリア料理だ。その基礎を知らない料理人では、決して良い料理は作れない」まさになんでもアリと言わんばかりのクリエイティブな料理の世界への指摘でもあったのですが、それは料理のみに限らず、言語など全ての事柄においても共通しており、しっかりした基礎を持つ事こそが大切。といった意味合いでもありました。そのシェフと出会って、十数年経つ今でも、もっと本を読みなさい。イタリア語を勉強し続けなさい。そんな言葉を貰います。表向きには、努力や苦勞を見せず、けれども常に進化を続ける彼らの存在のお陰で、もっともっと頑張らなくてはと、いつもそんな気持ちにさせられます。

<検定対策コラム 第6回>

準2級対策

多くの受験者の要望により2013年3月(第36回)に新設された準2級は第43回までで延べ1,868人が受験し、619人が合格しています。

「2級を何度も受けてきたけれど、一向に受からない……」といった方々が、準2級に合格し、その弾みで再び2級にチャレンジする意欲を持っていたら当協会事務局も嬉しい限りです。しかし、3級を突破したばかりの受験者にとっては、準2級も新たに学ぶ文法が多く、目の前に立ちはだかる壁であることは変わらないかもしれません。

実際、「準2級は対策本がないので何を勉強したらよいかわからない」といった声も良く聞かれます。そこで今回の検定対策コラムでは準2級の傾向と対策について触れたいと思います。

3級では直説法に加えて、命令法や条件法といった新たな法が出題されています。「ということは直説法はこれで終わりなのかな?」と思われるがちですが、準2級ではもうワンステップ上の様々な直説法の使い方が問われています。

その直説法の用法の一つに「先立未来(futuro anteriore)」と呼ばれるものがあります。3級を合格している方は、もちろん知っていますよね?

未来のある時期より前に完了してしまっている行為などを表す用法で、助動詞の avere または essere の未来形+過去分詞の形にし、dopo che、quando、appena などと共に用います。

Dopo che **avrò passato** qualche giorno al mare, tornerò in città.

「数日間海で過ごしたら、街に戻るでしょう」

Usciremo appena **avrà smesso** di piovere.

「雨がやんだら、出かけましょう」

ただ、会話では、上記の用法で「先立未来」の代わりに「単純未来(futuro semplice)」が用いられる傾向が強まっています。

Usciremo appena **smetterà** di piovere.

(意味はもちろん変わりません)

前述の用法に代わって、会話で一般的に用いられている「先立未来」の用法が、「過去の行為において、推量・疑念などを示す」ものです。「先立未来」という言葉に惑わされてしまいがちですが、ここでは未来ではなく過去の意味になり「…だったのだろう」というような訳になります。

2015年春 N38【正答率17.5%】

- Sai per caso dov'è il mio portafoglio?

- Non ne ho idea. L'_____ lasciato nei pantaloni che portavi ieri.

a) avrai b) avresti c) abbia d) avessi

「ひょっとして、僕の財布がどこにあるか知ってる?」「そんなこと見当もつかないわ。昨日はいたズボンに入れっぱなしにしたんでしょ」

2015年秋 N30【正答率51.6%】

La settimana scorsa a Venezia faceva piuttosto freddo, ci _____ quattro o cinque gradi al massimo.

a) saranno b) sarebbero

c) siano stati d) saranno stati

「先週ヴェネツィアはかなり寒かった。せいぜい4度か5度だったろう」

正解は前者が a 後者が d で、いずれも「過去の推量」を意味しています。

準2級ではこの「過去の推量を示す『先立未来』」を問う問題がこれまで何度か出題されていますが、決して正答率が高い問題とはいえません。この用法は、初級・中級の文法書には掲載していないことが多く、準2級以上を目指す受験者の方々がもしこのような文法書をお使いでしたら、上級者向けの文法書に切り替えることをお勧めします。

◆お薦めの上級者向け文法書◆

『現代イタリア文法』 白水社 坂本 鉄男著

『これならわかるイタリア語文法 入門から上級まで』 NHK出版 武田 好著

『本気で学ぶ中・上級イタリア語 CD BOOK』

ベレ出版 本多 孝昭著

準2級では、このほか「要求を和らげて表現する『半過去』」など3級までには見られなかった直説法の用法が多く出題されています。「遠過去」といった新たな時制も出てくるので、まずはしっかりと直説法全体を見直すことが準2級合格への一歩につながるのではないのでしょうか。

動詞の法の入り口である直説法といえども侮るなかれ。その使い方はとても奥深いのです。

検定ニュース

◇2017 年春季第 44 回試験志願者数報告

	札幌	仙台	東京	横浜	金沢	名古屋	京都	大阪	岡山	広島	福岡	宮崎	那覇	ローマ	ミラノ	計
準2級	1/1	2/2	112/133	18/20	2/3	14/16	10/15	31/34	1/1	2/2	10/12	0	0	7/8	15/16	223/225
3級	7/10	8/10	215/259	36/42	5/6	27/31	30/35	58/66	5/6	1/2	7/8	2/2	1/1	5/5	12/15	419/498
4級	10/13	10/12	220/265	34/39	5/7	39/45	61/72	74/84	2/6	7/9	18/22	1/1	3/3	3/3	6/8	493/589
5級	11/11	12/14	127/172	25/30	7/8	26/32	22/25	41/48	6/9	7/7	10/14	2/2	3/3	4/4	2/3	305/382
合計	29/35	32/38	674/829	113/131	19/24	106/124	123/147	204/232	14/22	17/20	45/56	5/5	7/7	19/20	35/42	1442/1732

受験者数/志願者数

第 44 回検定でのアンケートから、受験者の感想などをピックアップしました

●完璧にオーガナイズされていて、本来の力を発揮できた ●携帯のバイブ音が鳴って気になった ●試験前に過去のアンケートの具体的な、ユーモアのある苦情を話してくれたおかげで、静かに受験できた。毎回このようにして欲しい ●普通の書店ではイタリア語検定の問題集があまりおいていないため、注文すべきか迷う。3 級以上になると自分の苦手なところにピッタリと対処できるようなテキストをうまく見つけられず、困っている。上手な探し方はないか？ → 検定の HP「参考書籍」でもいくつかご紹介しています（amazon で取寄せ可能）ので、ご参考にして下さい ●以前よりも web ページが充実して利用しやすくなった ●HP からリスニングの音声をスマホで聞けるのは便利 ●e ラーニングのクイックリスニングが役立った。コンビニプリントも便利だった。過去問を解いたことで、できた問題があった ●オンラインの学習ツールが役立っている ●ゆるゆると勉強している者としてはこのような機会を頂くと意欲が変わる ●毎回問題が面白く、長文は読んでいて楽しかった ●3 月にイタリア旅行をするために、最低限の会話と文法を習得しようと思い、そのためには検定が一番の近道だと思い検定を受けた ●ほぼ勉強せずに渡伊したときに不便したので、もっと勉強しておけばよかったと後悔し、今回臨んだ検定。受かっていなくてもあきらめずに続けたい ●いつもは地方受験しているが、今回は東京で受験。どの会場でもスタッフが丁寧に運営されていると感じた。これだけの人がイタリア語を学んでいると思うと、うれしく、頼もしく感じた。これからもイタリア語を頑張ろうと思った ●イタリア語は入口はやさしく、中に入ると難しい。他動詞、自動詞の区別をおろそかにしていたので 3 級に来てつまづいている ●今回の受験で自分が何を勉強しなければならなかったか分かった。モチベーションが上がった ●Web で無料で過去問が公開されるなど他の検定試験よりも学生にやさしい試験だと感じている ●NHK ラジオ講座のストリーミングを聴くことで、リスニングは強化されていると感じたが、作文や読解などが力不足。今後はバランスのとれた勉強をしたい ●準 2 級の参考書がないため、対策に迷いがあった。それでも準 2 級があることで、2 級へのステップアップがより近くなるように思える ●NHK のイタリア語講座を勉強しているが、受験すると独学で勉強している難しさがある。語学学校に行った方が良いですか？ → 無料体験を実施している学校もありますので、方々試してご自分に合った学校を見つけるのもひとつですが、やはり過去問を徹底的にマスターするのが基本です ●リスニングがなかなか上達しません。NHK のイタリア語講座以外に毎日続けたいものはありますか？ → 敢えて、目標レベルの 1 段階下の過去問題 CD や e ラーニング・コンビニプリントの音源を、話されているのと同じ速さで復唱できるまで繰り返し練習するのは大きな効果があります ●今回で 3 度目の準 2 級。留学経験があっても、勉強不足を痛感する。それでもイタリア語検定がないと勉強の動機にならないので、結果が悪くても大好きなイタリア語を続ける ●試験官などが感じよく、頑張ってくださいと励ましてくれてうれしかった (“→”は事務局からの回答です)

●**事務局よりホームページ活用のお願い** www.iken.gr.jp
 イタリア語検定試験のお知らせだけでなく、イタリア関係の情報・学校・リンク集など情報を満載しております。過去の問題も e-ラーニング・システムで配信しておりますし、コンビニプリントで過去問も配布しています。また、情報交換の場として掲示板をご用意しています。ご活用いただければ幸いです。ご要望や受験・お仕事体験談等、メール (info@iken.gr.jp) でお寄せください。

＜2017 年度の試験日程ご案内＞

◆第 45 回 2017 年 10 月 1 日(日)

◆第 46 回 2018 年 3 月 4 日(日)

▶伊検公式 LINE スタンプができました◀

伊検ならぬ伊犬のイタリアン・グレイハウンド、Iken 君と、その彼女の Ali ちゃんの楽しいスタンプで LINE の会話を楽しんでください！日本語もついています。



◆イタリア留学専門誌発刊のお知らせ◆

日本初のイタリア留学専門誌 "Study in Italy" が 2017 年 6 月に発行されます！ 語学学校・専門学校・大学などイタリアでできる留学の魅力を余さずご紹介。イタリア各都市それぞれの魅力や、留学中の方々の体験談も盛りだくさんの一冊です。

発行：株式会社アルク

企画・制作：株式会社トゥモロー 定価：980 円

<http://www.anokuni.com/studyin/italy>

PR